

interview インタビュー

今回は、TBS ラジオ番組「ゆうゆうワイド」でおなじみの大沢悠里氏にご登場いただいた。同番組は、始まってすでに19年を超えており、だれでも一度は同氏の声を耳にしたことがあると思う。また、同氏は、弁護士会館2階「クレオ」の命名等にもかかわられている。

(聞き手：田口 明、石黒清子)

プロフィール おおさわ・ゆうり

1941年2月東京・浅草生まれ。1964年3月、早稲田大学第一法学部卒。1964年4月、TBS 東京放送入社。入社して5年間、報道番組を担当。その後、主にラジオを中心にワイド番組を担当する。1991年2月、アナウンス部長を最後に独立。現在、フリーアナウンサーとして活躍中。

フリー
アナウンサー

大沢悠里さん

——「ゆうゆうワイド」が19年、回数にして5000回を超える長寿番組となっている秘訣は何ですか。

長く続ける秘訣は淡々とやることです。驚かしてやろうとか何か企画でわっとするとかいうと長続きしません。ラジオの場合は、淡々と1日1日やって徐々に定着していくのではないのでしょうか。だから、僕はよくお寺の「階段」にたとえるのですが、階段のてっぺんは見ない。「あそこまで行く」と思うと大変になってしまう。1段ずつ下を見て歩く、それで気が付いたら19年で5000回ということです。

——番組のネタはどうやって探しているのですか。

新聞と、やはり人に会うことです。芝居なんか毎月5本くらい見ますし、本は1週間に平均して15～16冊くらい送られてきますので、興味のあるものには

目を通しています。

あとは時間があったら出掛けて行く。だから、新聞記者みたいなもので、年中動いているというか、歩いていないと駄目です。それに、ものの見方もぼさっと見ない。「何だろうこれは、何故だ」とか「面白いな、どういうことなんだ」とか疑問に思うことがネタになってきます。

——「ゆうゆうワイド」は、1日でピーク時には200万人の人が聴いているとのことですが、プレッシャーはありませんか。

僕はたまたまちよっと口がうまくてアナウンサーになっただけで、偉くもなんともないです。目立ちますけどね(笑)。そう思うと気が楽です。有名人になるとホテルでも飲み屋でも行くと、特別扱いされて普通がわからなくなってしまう。電車にも乗らないでし



僕の番組が心の支えになっていて、手紙がきたときは、涙が出てしまいます。自分も少しはみんなの役に立っている、アナウンサーになってよかったな、と。

よ。電車に乗れない人間がラジオでしゃべれない、普通にやっていることが大事なんです、特別扱いされないラジオがいいんです。

もちろん、いろいろな立場の人が聴いていることは、いつも頭に入れておかなければいけません。僕は、10年半前に脳梗塞で倒れて1か月入院したことがあって、それからは病室で聴いている人にがんばりましょうと言うようになりましたね。

——番組をやっている、どんなことが心に残っていますか。

僕の番組が心の支えになっているという手紙がきたときは、うれしくて涙が出てしまいます。

ご主人を亡くされて、お子さんもいない。そんな方が早朝ラジオをつけてゆき、パートから戻ってきて、冬なんか暗くて寂しいじゃないですか、そんなとき、ラジオから僕の声が流れてくると、「ああ、悠里さんが待っていてくれたな」という気持ちになってくださる。

それから、家庭のことで悩んで自殺しようと思って、タクシーに乗ってぼーとしてたら、僕の番組がかかっていた。金曜日なんですけど、ちょっとエッチな「お色気大賞」というコーナーをやっていて、自分でやっても笑ってしまうのですが、これを聴いているうちに、なんか死ぬのが馬鹿馬鹿しくなって、生きているのだから考え直そうって。

何気ないことですが、自分も少しはみんなの役に立っているな、アナウンサーになってよかったなと思っています。

——リスナーからの手紙等には、どのように対応していますか。

いろいろな手紙がきます、最近はメールが多いですね。僕が一番最初に全部に目を通して、これは返事を書くとか、電話をかけるとか、きめ細かくやっています。ラジオイコール気配りしかありません。口コミが

大事で、1人を喜ばせると100人が喜ぶわけです。だから「わざわざ電話をかけてくれたわよ。手紙くれたわよ」となると「あらそうなの。じゃ、私も聴いてみましょうか」となるわけです。

——弁護士の仕事については、どのように感じていますか。

弁護士に友人もいますし、だいぶ前、当番弁護士の発起人の1人となって、女優の竹下景子さんらと手伝ったことがありました。放送でもずいぶん取り上げました。やはり弁護士さんは正義感ですね。誇りとエリート感覚は違う、ここのところを間違っただけじゃない。特別なんだと思っただけです。

——毎日の目標は何ですか。

やっぱり、毎日毎日楽しくなければいけないということです。今日は、人生で一番若いんだ。今日より若い日はないって、いつも思うことですね。だから、毎日が無駄にしないこと。難しい試験に受かって、アナウンサーになっても、しばらくすると感激が薄れて、だんだん当たり前と思うようになる。当たり前と思ったとき不幸が始まる。

僕は、この年になって、この商売に就けたことが、こんな幸せはないと今でも思っています。弁護士さんにも、弁護士の仕事に就けたことの幸せを感じてほしい。そして、正義の味方になってほしい

(構成：田口 明)